

日语行为授受表达的习得研究

日本語における授受表現の習得に関する研究

孙成志 著



世界图书出版公司

本专著受“中央高校基本科研业务费专项资金（DUT14RC（3）155）”资助出版

日语行为授受表达的习得研究

日本語における授受表現の習得に関する研究

孙成志 著



中国出版集团公司



世界图书出版公司

广州·上海·西安·北京

图书在版编目 (CIP) 数据

日语行为授受表达的习得研究 / 孙成志著. —广州:
世界图书出版广东有限公司, 2017.1
ISBN 978-7-5192-2333-5

I. ①日… II. ①孙… III. ①日语—语用学—研究
IV. ①H363

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2017) 第 001887 号

书 名	日语行为授受表达的习得研究 RIYU XINGWEI SHOUSHOU BIAODA DE XIDE YANJIU
著 者	孙成志
责任编辑	宋 焱
装帧设计	黑眼圈工作室
出版发行	世界图书出版广东有限公司
地 址	广州市新港西路大江冲 25 号
邮 编	510300
电 话	020-84460408
网 址	http:// www.gdst.com.cn
邮 箱	wpc_gdst@163.com
经 销	新华书店
印 刷	北京振兴源印务有限公司
开 本	710mm × 1000mm 1/16
印 张	12.25
字 数	218 千
版 次	2017 年 1 月第 1 版 2017 年 1 月第 1 次印刷
国际书号	ISBN 978-7-5192-2333-5
定 价	38.00 元

版权所有，翻版必究
(如有印装错误，请与出版社联系)

序 文

この度、孫成志さんの博士論文が、中国で公刊されることになって、大変喜んでいる。この論文が、中国で日本語教育に携わる多くの先生方や研究者、あるいは研究者を志す若い方々の目に止まり、中国語母語話者への「授受補助動詞」の習得に関する理解や議論を深め、学習者の日本語運用能力の向上に少しでも役立ち、あるいは日本語教育学研究への貢献ができれば有難い。また、この著作の序文を書く機会を与えていただき、非常に光栄なことと感謝している。

本論文は、中国で学ぶ中国語母語の日本語学習者を対象に、日本語の行為の授受を表す授受補助動詞の理解と運用に関する要因を調査し、考察した上で、教育現場への応用を提言することを目指した実証的研究である。行為の授受を表す授受補助動詞「テアゲル/モラウ/クレル/サシアゲル/イタダク/クダサル/ヤル」の3系列7形式について、日本語能力試験N1（または旧試験1級）合格者である上級学習者でも、助詞や授受補助動詞の選択間違いなどの文法上の誤りの他、語用論上の「脱落」（不使用）や「過剰使用」の誤りが多い。そのような授受表現の学習者の習得と運用に関する要因を明らかにすることを目指した研究である。

この目的のために、本論文では、まず日本語の授受補助動詞を、次の2つに分けることとしている。

- (a) 「恩恵・利益」を表す基本的な意味機能（例：「手伝ってくれてありがとう」）
- (b) 行為の授受を構成する要素が抽象化することによる派生的な意味機能（例：（料理番組）「よく煮込んであげるとおいしくなりますよ」）

さらに(a)の発話場面を、行為の与え手が会話の聞き手である「対話」場面と、(b)行為の与え手が話題の人物である「（第三者から受けた恩恵的行為を聞き手

に伝える) 叙述」場面の2つに分けて調査した。(b)については、シナリオ分析から10種類の派生的意味機能を持つ授受補助動詞を抽出した上で、中国人上級学習者の理解を探る調査を行っている。

その後、学習者の母語の日本語への影響を考察するために、日中対照分析をコーパスを用いて行い、さらに学習者が受けた日本語教育を探るために、教材分析と教員へのインタビューを行っている。

本研究で実施された調査をまとめると、以下の6種類である。

- (1) 中国人学習者80名と日本語母語話者50名への質問紙調査(談話完成テスト)
- (2) 映画やテレビドラマのシナリオ分析
- (3) (2)を通して得た10種類の「派生的意味機能を持つ授受補助動詞」の理解についての中国人上級学習者30名への半構造化インタビュー調査
- (4) 『日中対訳コーパス』(北京日本学研究中心 2003)を用いた日中対照研究
- (5) 中国国内でよく使用されている4種類(16冊)の日本語教科書の教材分析
- (6) 中国人日本語担当教員6名への授受補助動詞の指導方略に関するインタビュー

本論文では、授受補助動詞の習得を調べるために、このように多岐にわたった研究デザインを採用し、実施している。すなわち、対象とする言語そのものの調査[(2)と(4)]、学習者の習得・運用状況の調査(1)、母語話者の判断の調査(1)、学習者の(派生的用法の)理解についての調査(3)、教材の調査(5)と教員の考え方の調査(6)と捉えることができる。これらは言語の分析から始まって、その使用者である母語話者と学習者の理解と判断の調査、そして教育方法についての検討、と重層的かつ有機的に調査が行われており、目配りの行き届いた研究デザインになっている。

論文では、序論(第1章)、先行研究(第2章)に続けて、本論文の主眼である授受補助動詞の2つの研究課題を3、4章で分析し論じている。すなわち「恩恵・利益」の基本的な意味機能を表す授受補助動詞の使用実態と運用能力(第3章)と、派生的な意味機能を表す授受補助動詞の理解状況(第4章)である。そこで得た調査

結果をさらに考察するために、学習者の母語・母文化の影響（第5章）と、日本語教育における授受補助動詞の取り扱い（第6章）に分けて論じている。終章である第7章では、結論と教育への提言に加えて、本研究の限界と今後の課題がまとめられている。

このように本論文では、中国語を母語とする学習者への授受補助動詞の習得をめぐって、順序だててかつ緻密に多面的探求が行われた。それぞれの方法論についても、慎重に吟味され妥当性が示されていることは評価できる。これらの調査の結果、以下のような事柄が明らかになっている。

- ・「テアゲル」系の授受表現では、行為の受け手が「上位」である場合、CJもJNと同様に殆ど使用しない傾向が見られた。しかし行為の受け手が「同等」「下位」の場合、親疎を問わず「テアゲル」系の使用率がJNをはるかに上回っていることから、（「恩着せがましい」印象を与えてしまうという）語用論的な誤りを犯す可能性が示されたこと。
- ・「テクレル」「テモラウ」系の表現については、今回のCJは、上下関係に最も配慮して使い分けていることがわかったこと。また授受表現を使うべきところで使用していない「脱落」の問題は、「対話」場面よりも「叙述」の場面でよく起こることが示されたこと。
- ・今回のCJの習得順序は「テアゲル」→「テクレル」→「テモラウ」であることが示された。「テアゲル」の習得が早いことは先行研究を支持するものである。
- ・派生的な意味機能を持つ授受補助動詞は、場面依存性が高く使用場面が限られていることに加え、ほとんどの場合は、前後の文脈や言語外情報といった語用論的要因で恩恵以外の派生的意味機能を表出している。今回のCJは前後の文脈や母語を手がかりにして、話し手の表現意図を理解できており、言語的、語用論的な意味を読み取ることが可能であることが示された。
- ・日中対訳コーパスからは、「テクレル」が訳出されないことが多く、中国語母語話者には最も意識しにくい表現であることが示唆された。
- ・教材分析の結果からは、3系列7形式の授受補助動詞を全て1度に導入する場合と、3系列を別にして導入する場合がある。「テアゲル」の恩着せがましさを回避するために消極的な「回避」の指導を勧めるものが多く見られた。
- ・今回分析した教材分析の結果からは、日中両言語の授受表現の相違点の説明が不十分であったことが指摘された。

本研究で明らかにされた点は、日本語教育学の分野で今後の教育実践に生かされ得ることが多く、また検証可能性の高い健全な調査がなされているので、今後のさらなる調査研究への道筋をも示したものと高く評価できる。

博士論文の審査委員会は、副査として古川裕教授（中国語学）、鈴木睦教授（日本語教育学）、堀川智也教授（日本語学）、そして清水政明准教授（ベトナム語学）と主査真嶋（日本語教育学）の5名で構成された。審査員は、最終審査会での数々の質問にも的確に答えて納得のいく説明をし終えた孫さんの実力に満足すると共に、それまでの孫さんの真摯な勉強ぶりと、優れた研究業績をあげていたことも合わせて、皆が賞賛の言葉を述べていたことを、懐かしく思い出す。

孫成志さんは、私がこれまで指導した多くの大学院生の中でも、研究者としての資質が極めて高く、鋭い洞察力と的確な判断力、仕事の処理の速さと確かさでもって、大阪大学大学院博士後期課程を国費留学生として最短距離で駆け抜けた。その上に、誠実で協調性がありリーダーシップもあるが謙虚であるという人柄の良さで、深い印象を残してくれた。孫成志さんのような指導学生を持てたことは、私の誇りであり宝であると言っても過言ではない。中国の大学教育の現場で、教育にも研究にも益々貢献され、ご活躍されることを願いつつ、孫成志さんの博士論文が、公刊されて役立つことを願っている。

2016年10月吉日

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 教授

真嶋潤子

要 旨

1. 研究の背景と目的

本研究は、JFL 環境における中国人上級学習者を対象とし、日本語の行為の授受を表す補助動詞の使用実態と言語運用に関わる要因を、質問紙調査とインタビュー調査を通して、明らかにしようとした実証研究である。

日本語の授受表現を既に学んだ中上級学習者でも、母語話者との接触場面において、助詞の誤用や授受補助動詞間の混用などによる文法上の誤りのほか、(1)のように文法的には正しいが、授受表現を使用すべきところで使っていない「脱落」や、使用すべきでないところで使ってしまう「過剰使用」などといった語用論的な誤りが目立つ。

(1) a. ?その友達のお母さんが、私達を自分の息子のようにかわいがった。

b. ?先生は韓国語がわからなければ、私が訳してあげます。

(堀口 1983: 98-100)

しかし、初級段階で日本語の授受表現を学習済みの学習者が、どんな場面において上述した語用論的な誤りを犯すのか、またなぜこのような誤りを犯すのか、その状況については、まだ明らかにされていない。

そこで、本研究では、行為の授受を表す表現に関する、より効果的な指導方法を探るため、JFL 環境における中国人学習者による実際の場面における授受表現の使用実態と運用能力を明らかにした上で、日本語の授受表現の習得と運用に関わる要因を、日本語教育の視点から検討し明らかにすることを目的とする。

2. 研究の内容と方法

本研究では、日本語の授受補助動詞の習得状況を、誰かのための「恩恵・利益」となる行為であることを表す基本的な意味機能（以下、基本的な意味機能）と、行為の授受を構成する要素が抽象化することによって派生してきた意味機能（以下、派生的な意味機能）に分けて検討することにした。

前者の「恩恵・利益」の基本的な意味機能に関しては、行為の授受を表す発話の場面を行為の与え手が会話の聞き手であるか、「話題の人物（第三者）」であるかによって、(2)のように「対話」と「叙述」の場面に分けて、中国人学習者 80 名と日本語母語話者 50 名を対象に、談話完成テスト (Discourse Completion Test) による「産出レベル」の調査を行った（第 3 章）。

(2) a. 「対話」の場面

留学生：先生、すみませんが、履修届にサインしてもらえますか。/
履修届にサインしてくださいませんか。

先生：いいですよ。どこに？

b. 「叙述」の場面

友達：昨日大雨だったけど、どうやって帰ったの？

留学生：帰りに田中さんに会ってさ。彼に駅まで送ってもらったんだ。/
彼が駅まで送ってくれたんだ。

また、後者の派生的な意味機能に関しては、(3a)の被害や不利益を表す「～てもらっては困る」という表現や、(3b)の話し手の思い入れを表す「～てあげる」表現が挙げられる。このような授受構文の「言語的」また「文脈的」意味機能が、どのように理解されているのかを解明するため、テレビドラマのシナリオ分析から得た会話例を活用し、中国人学習者 30 名を対象に半構造化インタビュー (Semi-structured interview) による「理解レベル」の調査を行った（第 4 章）。

(3) a. 勝手にやり方を変えてもらっては困るよ。社内には慣例つてものがある。慣例！

b. じゃがいもをこうしてしっかり煮込んであげると、おいしくなりますよ。

そして、考察の部分では、中国人学習者による日本語の授受補助動詞の「理解」と「産出」に関わる要因を探るため、まず、『日中対訳コーパス』（北京日本学研究センター 2003）から抽出した 310 例の授受動詞構文とその対訳文を用いて、日本語の授受補助動詞とそれに対応する中国語の表現との関係を検討した（第 5 章）。その後、中国国内で主に使用されている 4 種類（16 冊）の日本語の教科書に関する分析と、6 名の中国人日本語担当教員を対象とする授受補助動詞の指導方略に関するインタビュー調査を通して、補足的にその考察を行った（第 6 章）。

3. 調査結果と考察

本研究を通して明らかになったことを上述した 2 つの意味機能の順にまとめる。

まず、「恩恵・利益」を表す基本的な意味機能を持つ日本語の授受補助動詞に関する「産出レベル」の調査では、以下の 3 点が明らかになった。

- 1) 行為の授受に「話題の人物（第三者）」が関与するかどうか、中国人学習者による日本語の授受補助動詞の使用と選択に深く関わっていることである。

「～テアゲル」系の授受表現に関しては、「対話（申し出）」と「叙述」のどちらの場面においても、今回対象とした中国人学習者は、行為の受け手が「上位」である場合、「～テアゲル」系の授受表現は殆ど使用せず、母語話者とよく似た使用実態であった。しかし、行為の受け手が「同等」と「下位」の場合に限って、親・疎を問わず、「～テアゲル」系の使用率が母語話者をはるかに上回っており、押し付けがましい印象を与えてしまうといった語用論的な誤りを犯す可能性が示されている。

また、「～テクレル」と「～テモラウ」系の授受表現に関しては、「対話（依頼）」の場面において、全体的に母語話者は「～テモラウ」系の授受補助動詞の使用を好み、中国人学習者はやや「～テクレル」系を多用する傾向が見られた。また、① 行為の与え手に与える依頼行為の負担度（高・低）、② 行為の与え手との心理的距離（親・疎）、③ 行為の与え手との上下関係（上位・同等・下位）との 3 つの要素のうち、今回対象とした中国人学習者は ③ 行為者間の上下関係に最も配慮しており、後述のように、行為の与え手と受け手との社会的関係、特に上下関係によって各授受補助動詞を使い分

けていることが窺えた。そして、受益表現の「脱落」による表現上の問題は、「話題の人物」から受けた恩恵的な行為を聞き手に伝える「叙述」の場面でもり目立つことがデータから明らかになった。

- 2) 中国人学習者は、3系列7形式の授受補助動詞の各言語形式を使い分けて、行為の与え手と受け手との社会的関係、特に上下関係を言語化しようとする傾向がある。

日本語母語話者は、呼びかけや、理由説明、相手への配慮と迷惑に対するお詫びを有する発話などを組み合わせ、行為者間との対人関係を調節している。しかし、中国人学習者において、行為者間の「親疎関係」による授受表現の使用実態は、顕著な差が見られなかったが、「上下関係」の要因からみれば、特に待遇性の高い場面では、話の場にはいない目上の人に対しても「～ていただく」や「～てくださる」などの丁寧度の高い表現を多用している。また、親しい同級生や後輩に対しては、命令や指示に近い間接的な依頼表現「～てくれ」と「～てください」の使用が多かった。これは、「ウチ・ソト」という立場より、身分の「上下」を大切にする母文化からの影響が強いと考えられる。

- 3) 今回の中国人学習者の習得順序を見ると、「～てあげる」→「～てくれる」→「～てもらう」であることが示された。

調査協力者の学習環境や母語の相違にかかわらず、3系列の日本語の授受補助動詞のうち、「～てあげる」が最も早く習得されるということが、これまでの先行研究では一致している。行為の与え手と受け手との人間関係や「話題の人物」の関与、場面などの要素によって、学習者による授受補助動詞の産出状況が異なるところがあるが、本研究では、「対話」と「叙述」のどちらの場面においても、「～てくれる」構文が「～てもらう」より多く生成されていることと、「～てもらう」の誤用がやや多く見られたことから、全体としては中国人学習者の受益表現「～てくれる」の習得が「～てもらう」に先行して進むと考えられる。

そして、派生的な意味機能については、本研究では、映画やテレビドラマのシナリオ分析を通して、上述した(3)のほか、下記のように、(4a)の話し手の決意や強い意志を表す「～てやる」や、(4b)の聞き手に対する気遣いや丁寧な気

持ちを表す「～てもらう」、(4c)の聞き手の負担を軽減するため用いられる「～てくれる」といった「恩恵・利益」以外の拡張用法が合わせて10種類確認された。

- (4) a. 狙った的は外さない。待つてろ早稲田! 絶対合格してやるから!
 b. この道を真つ直ぐ行ってもらって、角を左に曲がってください。
 c. もし君に、不安や迷いがあるなら、今からでも断ってくれて構わないから。

この10種類の派生的な意味機能を持つ授受構文の使用場面を用いて、インプット理解に関する調査を行った結果、授受補助動詞の選択者数からいうと、「～テアゲル」系→「～テクレル」系→「～テモラウ」系の順になっており、全体的に「～テアゲル」系の授受補助動詞はより理解されやすく、「～テモラウ」系はより理解されにくい結果となった。そして、上述した派生的な意味機能の用法は、大きく＜理解/産出可能な用法＞、＜理解可能な用法＞と＜理解困難な用法＞との3つに分けることができる。中上級学習を対象とする日本語教育において、(4a, b)のような「理解可能なインプット」を少しずつ導入することが必要かつ可能であると主張したい。

4. 日本語教育への提言と今後の課題

上述した調査結果とその考察に基づき、これからの中国人学習者を対象とする日本語の授受表現の指導に対して、次のような提言を行いたい。

まず、日本語の授受補助動詞の提出順序については、これまでに①3系列7形式の授受補助動詞をすべて1回の授業で導入する場合と、②「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」とその待遇表現を区別しそれぞれ1回の授業でまとめて教える場合との2つのパターンがあったが、どちらも授受補助動詞を初級の後半あたりで1つのかたまりとして「体系的に」導入している。しかし、今回の調査結果を考慮した結果、従来一括して導入されてきた日本語の授受補助動詞を解体し、一番習得されやすい行為の与え手を主語とする「～てあげる」構文を先に教え、その後、「～てくれる」構文から、「～てもらう」構文へと導入することを提案したい。また「～てくださる」や「～ていただく」といった難易度の高い待遇表現は、初級の終わりか中級に回すとよいと考える。

また、日本語の授受補助動詞の学習は、初級後半から始められるが、この時期

であれば文の文法的意味や言語形式の習得に最大の関心を払いつつも、発話の意味内容や表現意図などのコミュニケーション上の働きにも焦点を当てた指導も可能となる。具体的には「～テアゲル」系を指導するにあたり、今までの消極的な回避指導ではなく、学習者に母語話者による「～テアゲル」の使用場面を提示し、対人意識の理解を促した上、学習者自身が主体的に使えるように指導することの必要性和重要性を強調したい。また、「～テクレル」と「～テモラウ」系に関して、本調査では、受益表現の欠如による運用上の問題は、中国語の「事実志向」の現れであり、日中言語話者の物事に対する概念の相違に起因するものであると考える。日本語の話し手の立場から物事を捉える「話者中心性」と、第三者の行為に対しても話し手の価値判断を付与する主観性の強い「立場志向性」の二つの特徴を、中国語の「事実志向性」と比較しながら行うなど、指導の仕方を工夫する必要があると考える。

最後に、学習者のコミュニケーション能力を養い、授受表現に関する指導上の留意点をさらに深く記述するには、本研究を土台にして、単文レベルの授受表現だけでなく、複文やテキストレベルでの授受表現を考察していく必要があると考えているが、それについては今後の課題とする。

目 次

第1章 序 論	001
1.1 研究の背景と目的	001
1.2 研究の内容と方法	003
1.3 本論文の構成	004
第2章 日本語の授受表現に関する先行研究	007
2.1 授受表現の特徴	007
2.2 授受表現の習得に関する研究	011
2.3 本研究の位置づけ	018
第3章 行為の授受を表す表現の使用と習得	
—「恩恵・利益」を表す基本的な意味機能を中心に	021
3.1 調査概要	022
3.2 「～テアゲル」系の授受表現の使用実態	026
3.3 「～テクレル」系と「～テモラウ」系の授受表現の使用実態	039
第4章 日本語の授受補助動詞の使用場面における言語使用意識	
—派生的な意味機能を中心に	064
4.1 派生的な意味機能を持つ授受補助動詞構文に見られる対人意識	066

4.2	派生的な意味機能を持つ授受補助動詞構文に関する言語使用意識調査	083
4.3	基本的な意味機能を持つ授受補助動詞の「産出」状況との関係	091
第5章	授受補助動詞構文の産出と理解における母語・母文化の影響	093
5.1	日本語の授受補助動詞とそれに対応する中国語の表現	094
5.2	話し手の心理的視点と表現	102
5.3	人間関係の認知と文化的要因の影響	107
5.4	本章のまとめ	109
第6章	日本語教育における授受補助動詞の取り扱い	111
6.1	日本語の教科書と授受補助動詞	111
6.2	中国人日本語担当教員による授受補助動詞の指導方略	119
第7章	結 論	130
7.1	本研究の結論	130
7.2	日本語教育への提言	137
7.3	本研究の限界と今後の課題	143
例文出典一覧		145
参考文献		146
添付資料		166
謝 辞		178

第1章 序 論

1.1 研究の背景と目的

日本語の授受表現には、モノの授受を意味する本動詞（以下、授受本動詞）としての用法の他に、動詞の「テ形」に後接し、行為の授受を表す補助動詞（以下、授受補助動詞）としての用法がある。本研究では、後者の行為の授受を表す表現「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」にその待遇的なバリエーションを加え次の3系列7形式を研究の対象とする。

「～テアゲル」系^[1]：～てやる、～てあげる、～てさしあげる

「～テクレル」系：～てくれる、～てくださる

「～テモラウ」系：～てもらう、～ていただく

日本語の授受補助動詞は、恩恵性の表示や話し手の視点、待遇性など多くの要素が絡むため、日本語学習者にとって習得困難な表現の一つである。その誤用分析を行った堀口（1983）では、（1）のような助詞の誤用や授受補助動詞間の混用などによる文法上の誤りの他、（2）のように文法的には正しいが、授受補助動詞を使用すべきところで使っていない「脱落」や、使用すべきでないところで使ってしまう「過剰使用」などといった表現レベルに適切さを欠いている語用論的な誤りも目立つと述べている。

[1] 本研究では「～テアゲル」系は、「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」の3つの形式の総称であり、カタカナ表記にする。一方、具体的に1つの形式を記述する場合は、これと区別し「～てやる」のように平仮名表記にする。

(1) a. *^[2] 女の人、男の人に車にのっせてあげますからです。

b. * 鉛筆を借りたいなら、あそこのめがねをかけた男の人に聞いてください。きっと貸してあげるでしょう。

(2) a. ? その友達のお母さんが、私達を自分の息子の様にかわいがった。

b. ? 先生は韓国語がわからなければ、私が訳してあげます。(下線は筆者、以下も同様)

(堀口 1983: 95-100)

筆者は、中国の大学で中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人学習者）を対象とする日本語教育に携わっている。筆者の観察では、日本語の授受表現に関しては中級中期頃に助詞や構文、意味といった文法知識を確実に身につけており、ほぼ全員が授受構文を文法的に正しく使えるようになる。しかし、中上級学習者でも、親切にされた経験を他の人に話すときや、親しい人に手助けを申し出るときなど、「恩恵・利益」の授受を表す場面に応じて授受表現を適切に使用するのには難しいようである。つまり、初級文型の積み上げを経て中級クラスにきた中国人学習者の中では、行為の授受を表す表現に関する文法知識とその表現力とに乖離が見られることがある。そして、(3) のような適切さに欠ける表現は、場合によっては相手に不快感を与え、思わぬ誤解や人間関係の摩擦の原因になる可能性がある。そのため、本研究では、行為の授受を表す表現に関する文法知識ではなく、場面や対人関係に応じてその表現を適切に使用できる言語運用能力に着目して論を進める。

(3) a. 資料の配布を手伝うことをクラスメートに申し出るとき「? こんなにたくさんの資料はお一人で大変ですね、私も 配ってあげましょう。」
(→ 配りますよ / お配りしましょう)

b. 友人が差し入れを持ってきたことを他の人に話すとき「? 林さんが差し入れを 持ってきたよ。」
(→ 持ってきてくれたよ)

語用論的ストラテジーや発話行為の遂行に関する知識は、言語知識よりも遅れて

[2] 当該用例が、文法的・意味的に不適格な場合は記号「*」を、母語話者に使われない不自然な文の場合は記号「?」を記す。